颯爽！六月の…

人形浄瑠璃

四ツ橋畔

文楽座

乍憚口上

新緑すが〳〵しき初夏の好季節と相成申候處銃後の皆々様には日毎に御緊張の御事と恐察仕候從つて當座に於ては皆々様の明日への御活動に備へて愈々健全娯樂の必要を痛感致され更に内容を强化して尤も日本精神的なる趣味を盛り上げ固有藝術の眞價を發揚致す事に苦心罷在候次第に有之候而して一座連中は愈々職域奉公に邁進して一致協力只管御客様の御意に副ふやう努力いたし居り當興行より御馴染の鶴澤綱造儀久々復歸仕り又竹本叶太夫竹本角太夫も引續き御目見得致す事と相成り何れも捲土重來の意氣を以て相勤め可申候まゝ何卒倍舊の御引立に預り度尚又竹本陸路太夫儀御すゝめに預り候まゝ當興行より二代目竹本七五三太夫名跡を襲名致す事と相成り一層努力仕候間之れ又從前に倍して御引立に預り度以上ます〳〵充實したる陣容をもつて華々敷開場仕り候間何卒相變らず御引立御來場の程偏に奉御願申上候

昭和十六年六月一日

四ツ橋畔

文樂座 敬白

昭和十六年六月一日初日

初日午後二時開演

毎日午後三時開演

・御觀覽料・

一等席 御一名 金三圓五十錢（一階座席三十錢上り）

二等席 御一名 金一圓五十錢

三等席 御一名 金六十錢（各等入場税別）

一等御座席
一等椅子席 は五日前より

前賣切符發賣致居候

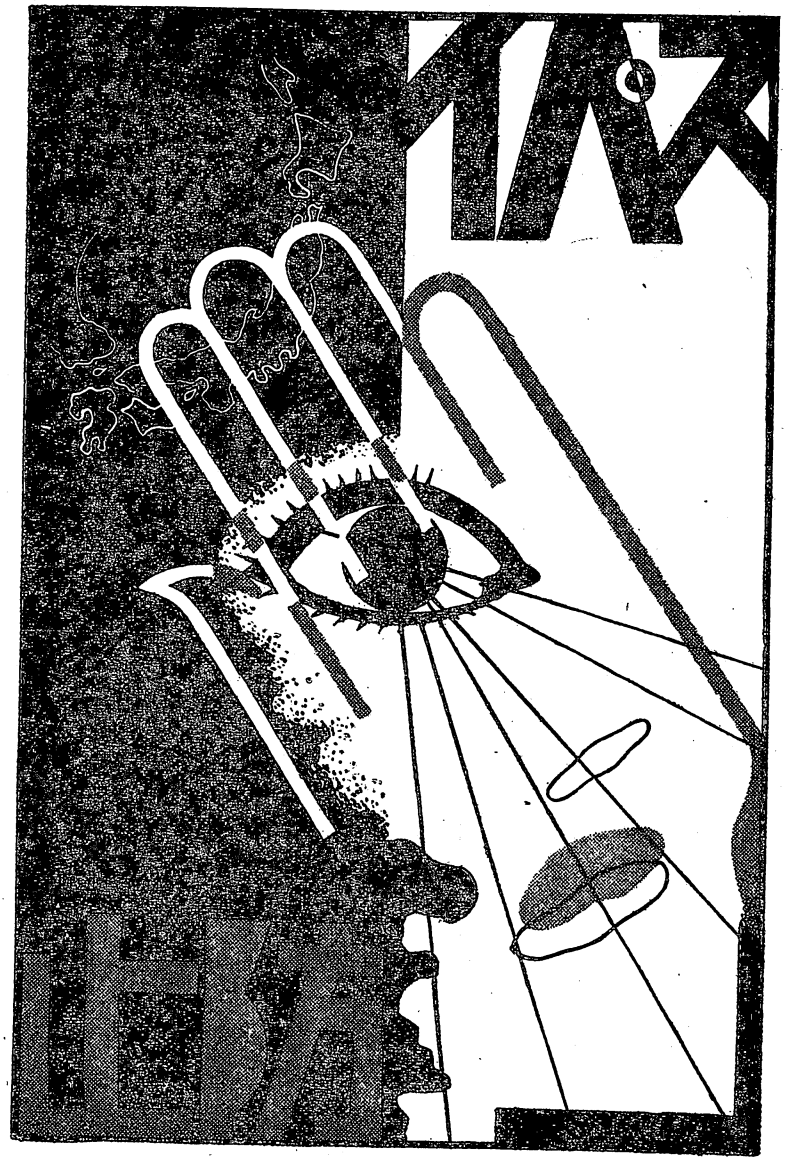
前賣切符專用電話 南(75)四七壹壹番

一般御用の電話 南(75)三〇三二番 三七八八番

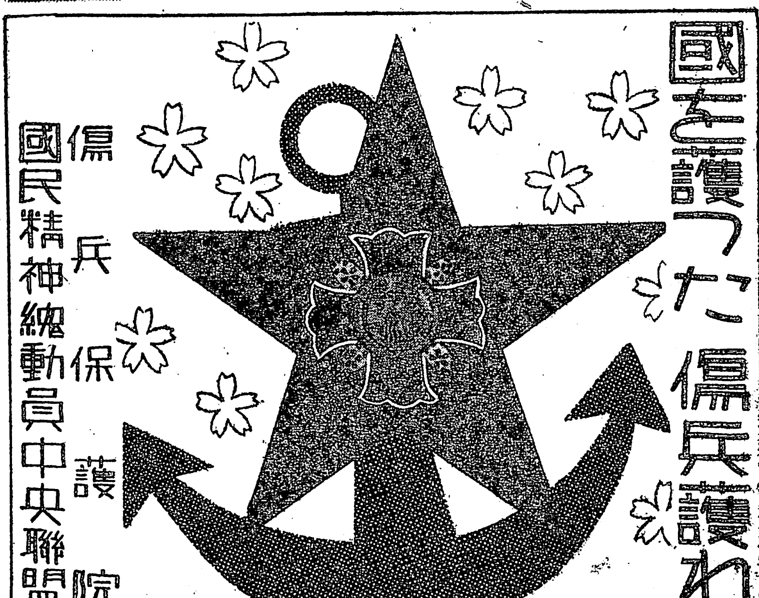
お草履の準備は御座ゐますが、靴、草履はそのまゝ御入場出來ますから御便利で御座ゐます。

本誌へカツト廣告御掲載希望の向は文樂座宣傳部へ願ひます

公奉域職・踐實道臣



國民精神總動員
盡忠報國
舉國一致
堅忍持久


國を護つた傷兵護れ
傷兵保護院
國民精神總動員中央聯盟

颯爽ノ六月の……

人形淨瑠璃

太夫・三味線・人形總出演

六月一日初日　初日午後二時開演
毎日午後三時開演

第一　忠臣藏
加古川本蔵下邸の段
道行旅路の嫁入

第二　一谷嫩軍記
熊谷物語の段
首實驗の段

第三　宮城野おのぶ　碁太平記白石噺
吉原揚屋の段

第四　新曲小鍛冶
鶴澤道八作曲　山村若子振附

第五　攝州合邦辻
合邦住家の段

文樂鑑賞手引

文樂の鑑賞に役立ちさうなことを、簡單に、全體的の事についてだけ書いて見よう。

文樂座のこと——人形淨瑠璃の組織とその由來——舞臺のこと——人形の遣ひ方のこと——だいたい、そんな順序で申上げてみませう。

人形淨瑠璃では、文樂がたつた一つの傳存劇團になつてしまつた。地方的、鄉土的にはほかにもあるが、常設劇場を有するものと言つてはない。けれども、文樂は寛政年度、おほよそ百五十年ほど前、淡路の人植村文樂軒によつて大阪に生れた劇場である。さうして、この三四十年來は、殆ど本邦唯一の人形劇團なのであつて見れば、「文樂」が「人形淨瑠璃芝居」の同義語のやうになつたのも當然でせう。古い所では、江戸にも大阪にも、五座七座と人形芝居があつて、歌舞伎に對抗し、時としては、享保から寶曆あたりまでは、つまり二百年前には、人形芝居のはうが盛んであつた。

普通に、三業より成り立つと言はれる。即ち、淨瑠璃を語る太夫と三味線彈きと人形遣ひの三者によつて組織されてゐるからである。ところで、この三者は、初めから一緒に生れて發達して來たかといふに、さうではなかつた。

人形を遣ふといふこと、これはずうつと古くからありました。記錄にあらはれた所では、遠く平安時代に傀儡子（くゞつまはし）といふものが見える。傀儡子は、支那の西方、中央アジア地方から漂遊して來た街頭演藝人であつたらしく、平安時代とあれば約一千年の前のことになる。淨瑠璃は足利時代中期の發生となつてゐるから、五百年の歷史と言へるでせう。これに對して、三味線は永祿年中に、琉球から泉州堺港に輸入された蛇皮線の本邦化なのであるから、ザツと三百七八十年前の舶來樂器である。先づ淨瑠璃と三味線とが提携し、慶長の初年あたりに、その淨瑠璃と人形遣ひとが握手して、淨瑠璃といふ物語を、言はゞ立體的に空間的に演奏するやうになつた。これが人形淨瑠璃劇の濫觴だといふことになる。

併しながら、その淨瑠璃界に竹本義太夫があらはれて音樂上の大成を試み、作者近松門左衛門を得て、戲曲的展開をも試みたのは、元祿時代のことに屬する。爾來二百五十年間、人形淨瑠璃芝居とあれば義太夫節に限るやうになつたのであつたこれは來歷のあらましであるが、淨瑠璃と三味線とによる演奏內容と人形の動作とがピツタリと合致して、三者諧調の美によつて成立する藝術なる點に、先づ御留意ありたい。

次に、人形と人形遣ひのこと。これも歷史的に言ふと、面倒だから、簡單に記す。

人形が手も足もないデクノボーから、肩板が發明され、手、足が生じ、口や眼の開閉や眉の上下が研究され、手の五指が折り屈みをするやうになるまでには、容易ならぬ年月と人知とが費された一個の人形を三人がゝりで、寫實的に遣ふやうになつたのが享保十九年の「蘆屋道滿大內鑑」（葛の葉の狂言）からといふことになつてゐる。今日

から大凡二百年前にあたる。但し、文樂座でもツメ人形（略してツメ）と呼ばれる、ごく下ツ端の役柄のは、一人で一個の人形を遣ふので、原始形式の人形なのです。

現今、文樂座の座頭と呼ばれる吉田榮三とか、吉田文五郎とかいふ上だつた遣ひ手、實盛なら實盛、お園ならお園の遣ひ手として、番附の上に記載されてゐるのは、「主遣ひ」と呼ばれる主任者で、頭と右手の動作を受け持つ。「左り」と呼ばれて左り手だけを遣ふ人が一人、「足遣ひ」といふ兩足の動作を受け持つのが一人。つまり三人遣ひといふことになる。この三人が主遣ひの呼吸に合せ、動作せしめてこそ、統一ある一個の人形として演技するので、これがまたむつかしい。足遣ひだけで十年近くも働らき、それから左りにまはり、やがて主遣ひに進む。

人形淨瑠璃の舞臺――それにも幾變遷があつた慶長以前の傀儡子時代のは、所謂首掛芝居で、一尺巾に二尺か二尺五寸限度の長方形の箱が舞臺であつた。それが次第に擴大されて、明治座の舞臺でも歌舞伎座のでも、何とかして使ふやうになつた。現今の大阪文樂座の舞臺は、間口が六間より少しつまつた程度であるが、それ以前のは三四間から五間くらゐのものであつたらしい。手遣ひ式でない絲操り式のは、もつと規模が小さかつた。

今の舞臺は、見物席寄りに三尺ほどの幅で、使はない部分がある。これが三の手。それから船底とも呼ばれて床の低くなつてゐるところ、歌舞伎の平舞臺に該當する部分が二の手である。二重舞臺に相當して、屋内に用ひられる、最も奥に位した部分は一の手、または本手といふ。元來は本手といふ本舞臺だけであつたのが、次第に擴大されて二の手三の手と見物席の方へ張り延ばしたから

の名稱である。

また、太夫と三味線とが、向つて右側へ張り出した床で語り、彈く。即ち横床といふものになつたのも享保年度のことで、義太夫近松頃のは、特別の場合以外は、正面の御簾の內側で語つたのである。人形遣ひも、その頃はからだを現はして使はずに、幕の蔭から人形を差し上げて遣つたもので、「蔭語り蔭遣ひ」と呼ぶ演出形式であつた。それが次第に「出語り出遣ひ」といふ形式に移行し、結局今日のやうな演出影態になつたのである

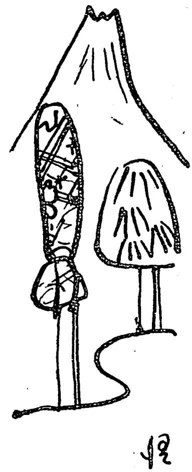
それでも、東京興行の場合のやうに、人形遣ひが序幕から切りまで、黑の頭巾をかぶらずに、出遣ひばりといふやうなことは、ごく近年になつての現象です。人形劇として見れば、人形遣ひは頭巾をかぶつてゐるのが本來であること申すまでもありません。

人形芝居といふものは、世界中に分布されてゐます。未開既開の民族を問はず、甚だ廣く、また古く行はれてゐる。けれども、日本のやうに發達したものは、殆ど類例がありません。淨瑠璃といふ音樂は別としても、「假名手本忠臣藏」や「菅原傳授手習鑑」のやうな、大きなスケールの人形劇臺本といふものや、或は三人遣ひの人形で複雜な演出をするが如きものは、嘗てないとされてゐる。

（河竹繁俊氏稿より抜萃）

忠臣藏（ちうしんぐら）

本藏下邸の段より 道行の段まで



本藏下邸の段は「増補忠臣藏」又は「義士忠臣藏」の外題のもとに度々舞臺に上る俗に「本下（ほんしも）」と呼ばれる一段で、作者も年代も不明のもの（嘉永後、安政か明治の間に出來た物と云はれてゐる。）「假名手本忠臣藏」の九段目山科閑居の場を逆に使つた行き方のもので、普通歌舞伎でも「假名手本忠臣藏」（寛延元年（二四〇八））八月竹本座初演。全十一段で竹田出雲、三好松洛、並木千柳合作）の第八段目「道行旅路の嫁入」と續けて出す事が多い。

加古川本藏下邸の段

中
竹本さの太夫
豐澤新太郎
竹本常子太夫
鶴澤友三郎
竹本津磨太夫
鶴澤清太友
豐竹宮太夫
鶴澤一郎右衛門

前
竹本文字太夫
豐澤新左衛門

後
豐竹呂太夫
豐澤仙糸

琴
豐澤仙三郎
鶴澤綱延

梗概

桃井若狹之助の臣井浪伴左衛門と下部が惡事の密々話、主君の妹三千歳姫を許婚の縫之助から遠ざけるため當下屋敷へお預けになつたのを伴左衛門が迎えに向けられたが、今日主君が本藏を御成

人形役割

桃井若狭之助	桐竹紋十郎
加古川本蔵	桐竹門造
井浪伴左衛門	吉田玉市
三千歳姫	吉田榮三郎
奴角内	吉田兵次
小姓	桐竹門次

敗の爲めお成りになるが幸ひ、邪魔な本蔵がなき後で毒薬を臺子の釜に入れて主君に飲ませ、殺して仕舞へば伴左衛門が心の儘と諜し合せて毒薬を釜に入れて、本蔵が後から隙見してゐるとも知らず、立去ります。

三千歳姫は明暮戀しき縫之助を思ひ、一人涙に暮るゝ折柄、伴左衛門が來て云寄ります。處へ加古川本蔵が出て伴左衛門の言譯を耳にもかけず、三千歳姫を奥へ立たせます。

折しも下部が出て、御家老本蔵を御成敗とあつて、急ぎ縄打つて奥庭へ引け、太刀取は伴左衛門へ申付けるとの御詫を傳へます。

若狭之助は本蔵に向つて、師直に怨みあれば、唯一刀と存ぜしに、汝が金銀を以て媚諂ひし故討洩らし、我は諂ひ武士と殿中一杯の取沙汰、其方は我れを騙つたなと云つて死罪を申渡します。若狭之助は自ら庭へ下り、太刀振下して、伴左衛門を斬り、返す刀で本蔵の縄を切解きます。若狭之

助は本藏に永の暇を遣し、尙短慮を止めた禮を述べ、本藏は臺子の秘密を語りて主君の武運を喜びます。若狹之助は虛無僧の編笠尺八袈裟を餞別に與へ、妹の禮に師直が屋敷の圖面を取らせて、大星方へ土產にせよと云ひます。

哀別の涙を呑んで行く本藏の後姿を見送る若狹之助の眼にも涙が浮んでゐます。

（佐和利）　**本藏下邸の段**

かくとしら齒も咲花の、桃井若狹之助が妹三千歲姫、慕ひこがるゝ縫之助に、別れほど經し物思ひ、目には涙の玉簾、明けて一間を立出て、釜の煮音耳に留め、アノもずやの煮え音は、松風に似しとやら、古へ須磨へ流罪の行平卿をこがれ慕ひし松風が託ち草、哀に消し憂身とや、ホンに縫之助樣と此三千歲が、身にひし〴〵と片時も、思ひ縫ふ夜の新枕、かはす互ひの言の葉も、朝月のまゝきぬ〴〵に、お別れ申して其の後は爰に月雪花川戸霞ケ關と引別れ、いつか屋敷へ歸る雁、文の便も音信も泣くはかもめか百千鳥、翅あるなら殿樣の、お傍へ行き

道行旅路の嫁入

妻戸無瀨（竹本角太夫　竹本叶太夫）

娘小浪（竹本南部太夫　竹本伊達太夫）

（竹本長尾太夫　竹本三瀧太夫）

ツ（竹本隅若太夫　竹本叶美太夫　竹本越名太夫）

レ

豐竹松島太夫
豐竹呂賀太夫
竹本織子太夫
豐竹伊勢太夫
豐竹千駒太夫
豐澤廣助
鶴澤寛治郎
鶴澤重造
鶴澤友衛門
鶴澤叶太郎
鶴澤友作
豐澤團伊三
鶴澤友太郎
野澤吉藏
竹澤團作
鶴澤德若
豐澤仙松
野澤勝之介
豐澤扇之助
鶴澤重造
鶴澤友衛門

人形役割

妻　戸無瀬　吉田文五郎
娘　小浪　桐竹紋十郎

たい〳〵と、人目なければ聲を上げ、かこち給ふぞいたわしき。

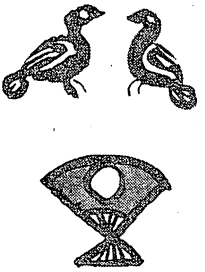
若狹之助四方を打詠め、誠や九枝燈火つきて、只曉を期すとかや、名殘はつきず目出たう門出の盃せん出立の用意いたせ。ハヽ君には益々御機嫌よう。オヽそちも無事ではない首尾よう仕負せ、目出たう〳〵未來で逢はうハヽア、馴れし衾の夢を貫く寒山寺、ム思ひもよらぬアノ唱歌は、妹三千歳が餘所ながら暇乞と見ゆる、ム幸ひ本藏そちも一曲いたせ、苦しうない赦す。ハハア、送る素足の氷のくさび、朝げの嵐に暮の雪、と浮れしことも最早迎ひの駕待つばかり、里の名殘の、柴小船、本藏近う〳〵。ハヽ、面を上げい、ア我二十五年の春秋をあしたには教訓の霧を拂ひ、夕べには講説の星を戴き、晝夜且暮のいつくしみ滿足に思ふぞよ、これが此世の見納めなるぞ。ハヽヽヽ、出立致せ、ハヽ。つきぬ名殘と本藏が涙を隱す編笠の、深き惠みに淺き緣、これのう暫しと三千歳姫、かけ出し給へば若狹之助、袖の枝折戸袂の關、おしかこまれて加古川も、笠の內より御顏を見奉れば姫

君も、いとゞ涙の糸竹の、末來は一つ一越斷金、やがて黄鐘鑒鏡は、君に仁なり臣に恩あるは音律音曲の、榮え榮うる世のためし、筆に傳へて加古川の、武名を永く殘しける。

（床本）　道行旅路の嫁入

浮世とは誰いひそめて、あすか川扶持も知行も瀬とかはり、よるべも浪の下、人に結ぶ鹽谷のあやまりは戀のかせ杭、加古川のむすめ小浪が言號、結納もとらず其儘にふり捨られし物思ひ、母のおもひは山科の聲の力彌をちからにて住家へおして嫁入も世にありなしの義理遠慮こしもとつれず乘物もやめて親子のふたりづれ、都の空に心ざす雪のはだへもさむそらは、寒紅梅の色そへて、手さき覺へずこゞへ坂、さつたとうげにさしかゝり見かへれば、富士のけぶりの空に消行衛もしれぬ思ひをばはらす嫁入の門火ぞと、祝ふて三保の松ばらに、つゞく、なみ松街道を、せましとうつたる行列は、たれとしらねどうらやまし、アヽ世が世ならあのごとく一度のはれと花かざりだてを駿河の府中過、城下すぐれば氣さんじに母のこゝろもいそ〳〵と二世のさかづきすんで後、閨のむつごと、さゝめごと親しらず子しらずと、つたのほそ道もつれあひ、男松の肌にぴつたりとしめてからみし新枕女夫が中の若緑り、抱て寢松の千代かけて變るまいぞの睦言は嬉しからふとほのめかす、アノ母さまのさし合を脇へこかくしてまり子川、宇都の山べのうつゝにも夢にも早ふ大井川、水のながれと人ごゝろ新の花にくらぶれば、日影の紅葉色づいて、つい秋がきて小男鹿の夫ゆへならば朝夕にしん苦するのも何の其、此拍手のうら若き二人が中にやゝ產んで、ねん〳〵ころゝんやねん〳〵が守はどこへいた、どことは知た其人に逢ふて恨を何とマアどう言てよからふと、しんき嶋田のうさはらし、我身のうへをかくとだに人しらすかの橋こへて、行ば吉田やの赤坂のまねく女のこゑそろへ、緣をむすばゞ清水寺へまいらんせ、音羽の瀧にざんぶりざ、毎日そふいふて拜まんせそふじやいな、しゝきがんかうがかいれいにうきう神樂太鼓にヨイコノゑい、こちに晝寢をさまされた都殿御にあふて、つらさがかたりたやそふとも〳〵、もしも女夫とかゝさまならば伊勢様の引合せ、鄙びたうたも身にとつて、よい吉左右に鳴見がた、熱田のやしろあれ

かとよ、七里のわたし帆をあげて艫びやうしそろへてヤツシツシ楫とる音はすゞむしか、イヤきり〳〵す鳴や霜夜とよみたるは小夜ふけてこそくれまでと、かぎりあるふね、いそがんと母がはしれば娘もはしり、空のあられに笠覆ひ船路のともの後や先庄野龜山、せきとむる伊勢と、あづまの別れ道、驛路のすゞの鈴鹿こへ、あひの土山雨がふる、ふり見ふらずみ定めなき旅はいろ〳〵うきが中、あなたの松蔭花やかに蓑笠立笠大鳥毛行列揃へぼつ立る武門の晴をあり〳〵とうつすや田子の浦人が髣面白く手をたゝき、富士の白雪朝日でとける娘島田は寢てとく帶のしんから底から戀にや夜も日も明ぬ物じやとな、テキサかはいさが增わいな、梅の苔と戀路の文はひらく間を待兼山の眞實せい文色にや憂身をつくす物じやとな、サアサ可愛さが增わいな、うかれて歸る里わらは、みなくちの葉にいひはやすいしべ、石場で大いしや小石拾ふて我夫となでつさすりつ手にすへて、やがて大津や三井寺のふもとを越て山科へほどなきさとへいそぎゆく。



一谷嫩軍記

熊谷物語の段
首實驗の段

寶暦元年十二月一日（二四一一）より豊竹座に上演された。淺田一鳥、浪岡鯨兒、並木正三、難波三藏、豊竹甚六、故人並木宗輔と作者名を並べてゐる。（並木宗輔は寶暦元年九月三段目までを作つて歿したと云はれてゐる。）全五段からなり、この段はその第三段目に當つてゐる。

梗概

爰は攝州生田の森なる熊谷次郎直實が陣屋で、木戸の外には、花も盛りの櫻木に近く、一枝を伐らば一指を切るべし、の制札が立つて居る。

落人と成つた平經盛が室藤の局は暫時の隱家を賴みに爰へ來て、圖らずも熊谷が妻相模に會ひ、我子敦盛の敵討に助太刀を賴んだりする。藤の局を兎も角も奥へ忍ばせた相模が、我子小次郎初陣

熊谷物語の段　竹本大隅太夫　鶴澤清二郎

首實驗の段　竹本相生太夫　野澤吉五郎　竹本織太夫　竹澤團六

人形役割

熊谷次郎直實　吉田榮三
妻相模　桐竹紋十郎
堤軍次　吉田文枝
藤の局　吉田小兵吉
石屋彌陀六　吉田玉幸
源義經　吉田光之助
梶原景時　吉田玉德
無官の太夫敦盛　吉田兵次
軍兵大ぜい

の様子や如何と案じて居る處へ、直實が思案の體で立歸り、相模を見ると不興顏、堅く言置いた詞に背き、女の身で陣中へ來た不屆を叱りつける。相模が、小次郎の初陣に心引かれて、つい百里近くの道を來て了つたと詫び、合戰の模樣を尋ねるのに、直實は、小次郎の比類無き働きから、また自分が敦盛の首級をあげた功名を語る。それを物蔭で聞いた藤の局、我子の敵と不意に切掛けるを熊谷は何奴と引据へたが、藤のお局と聞いて悔り上座に直して畏まる。と云ふのが、平家世盛りの頃、相模は藤のお局に仕へた者、一ト昔の以前、勤番の武士佐竹次郎と馴染め、御所を抜出で東へ下つたが、其の佐竹次郎こそ今の熊谷次郎直實であつた。

改めて熊谷は、須磨の浦曲に是非なく敦盛を討つた次第を物語る。

今は藤の局も、戰場の常と詮方なく諦め、せめては回向の爲と、一間に飾つた我子の鎧の前に、

遺品なる青葉の笛を吹いて手向けると、障子に人影、我子の姿よと駈寄るを相模が止める。

軈て直實は敦盛の首桶抱えて、實驗に供へ様と立つ折柄、源義經が現はれて其首級を實驗し、制札の意を察してよく討つたと褒める。

熊谷が出陣の支度に奥へ入つた跡、前に石屋の彌陀六引立てゝ詮議に來て居た梶原景高、二心ある義經、熊谷を鎌倉殿へ注進と、呼ばはり乍ら駈出したが、彌陀六が石鑿の手裏劍に打たれて息絶へる。

邪魔になる木葉、拾つて上げましたと、彌陀六が其儘行過ぎ様とするを、呼止めた義經が、彌平兵衛宗清と看破るので、其眼力に驚いた彌陀六、平治の亂の折、池殿と云合せて賴朝、義經を助けずば、平家は今に榮えんものと悲憤の涙に暮れる

出陣の時到移ると、義經が奥へ聲を掛ければ、直實が甲冑姿で現はれる。義經は一間から鎧櫃を取出させ、其方が大切に育てる娘に屆けて呉れと

渡すを、内あらためた彌陀六は、敦盛が入つて居るので悔りする。相模は、我子小次郎が敦盛の身代りに死んだを始めて知つて悲歎する。義經は其切なる心を察し、敦盛ならぬ小次郎の首級に名殘を惜ませる。

軈て義經が、西國出陣の時至れり、用意如何にと熊谷を勵ますに、直實が甲冑を脫げば黑染の衣頭も青い今道心の姿で、改めて永の暇を願ふから義經も無理ならぬ望みを許し、我が父母の回向をも賴む。

直實は驚き悲む相模を制して、向ふは西方彌陀の國、黑谷の上人を師と賴み、名も蓮生と改めて一笠一杖の僧とならむ、と心の中を語り、主從、親近、敵味方共に名殘を惜んだが、直實は一人別れ、一念彌陀佛即滅無量罪、十六年は一昔、あゝ夢であつたなア、とほろりとなつた氣を取直すと黑谷さして別れて行く。

（佐和利）

熊谷物語の段

其日の軍のあらましと敦盛卿を討つたる次第物語らんと座をかまへ、扨も去る六日の夜早や東雲と明くる頃、一二を爭ひぬけがけの平山熊谷討ち取れと切つて出たる平家の軍勢、中に一際勝れし緋威、さしもの平山あしらひ兼ね、濱邊をさして逃出す、ハテ健氣なる若武者や逃る敵に目なかけそ熊谷是に控へたり返せ戻せヲヽイ〳〵と扇を持つて打招けば、駒の頭を立て直し、波の打物二た打三打、いでや組んと馬上ながらむづと組兩馬が間にどふと落ち、ヤア〳〵何と其若武者を組敷てか、されば御顏をよく見奉ればかみ黑々と細眉に年はいざよふ我子の年ばい、定めて二親ましまさん、其歎きはいか斗りと子を持つたる身の思ひの餘り上帶取つて引立應打拂ひ早落場へとすゝめさしやんしたかそんなら討ち奉るお心ではなかつたの、ヲヽサ早落ち賜へとすゝむれど、イヤ一旦敵に組しかれ、何面目にながらへん、早首取れよ熊谷ナニ首取れといふたかいの、健氣な事をいふたなふ、サア其仰せにいとゞ猶涙はむねにせき上しまつ此通りに我子の小次郎、敵に組れて命や捨ん淺ましきは武士の習ひと

太刀も抜きかねしに逃さつたる平山が後の山より聲高く熊谷こそ敦盛を組敷きながら助くるは二心に極りしと呼はる聲に、ハヽアぜひもなき次第かな、仰せ置るゝ御事あらば言傳へ參らせんと申上れば、御涙を浮べ賜ひ父は波濤へ趣き賜ひ心にかゝるは母人の御事、きのふにかはる雲井の空、定めなき世の中をいかゞ過ぎ行賜ふらん、未來の迷ひ是一つ熊谷頼むの御一言、是非に及ばず御首をと咄す中より藤の局、ナフ左程母をば思ふなら經盛殿の詞に付き、なぜ都へは身を隱さず一の谷へは向ひしぞ健氣によらふた其時は母も倶々悦んですゝめてやりし可愛やな覺悟の上も今さらに胸もせまつて悲しやと、くどき歎かせ賜ふにぞ。

（佐和利）　**首實檢の段**

御大將勇みを付けんと、ヤア〳〵熊谷西國出陣時移る用意如何と仰に直實恐れながら先達て願ひ上し暇の一件かくの通りと兜を取れば切拂ふたる有髪の僧、義經も感心有り、ホヽさも有なんソレ武士の高名譽を望むも子孫に傳へん家の面目、其傳ふべき子を先き立て軍に立ん望みはホウ尤コリヤ熊谷願ひに任せ暇を得さするぞよ、汝堅固に出家をとげ父義朝や母常磐の回向も頼むと、したしき御詞、ハヽア有りがたしと立上がり上帶を引ほどき鎧をぬげば袈裟白無垢、相模是はと取付をヤア何驚く女房、大將の御情けにて軍半に願ひの通り御いとまを賜はりし我本懐、熊谷が向ふは西方彌陀の國、悴の小次郎が拔駈けしたる九品蓮臺一つ蓮の縁を結び今より我名も蓮生と改めん、一念彌陀佛、即滅無量罪。十六年も一昔アヽ夢であつたなと、ほろりとこぼす涙の露、柊に置く初雪の日影にとける風情なり。

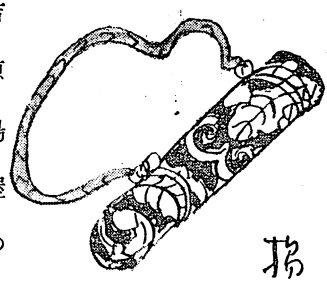
宮城野
おのぶ

碁太平記白石噺

吉原揚屋の段

安永九年正月（一四四〇）から江戸外記座に上演された全十一段もの。作者は烏亭焉馬、紀上太郎、容楊黛の合作。筋は有名な宮城野、信夫の敵討を慶安太平記の世界に織り込み、二女が宇治常悦（由井正雪）、鞠が瀬秋夜（丸橋忠彌）等の後援の下に目出度く親の敵志賀嘉七を討ち取ると云ふのを骨子としたもので、この段はその第七段目（通と野暮との客と客は意見しらるゝ曾我物語）に當り焉馬が受持つて書いたもの。吉原の眞中で田舎娘に思ひ切つて奥州訛を使はせた所がヤマである。

尙この二女の敵討の實説は、松平陸奥守の家老片倉小十郎の剣道の師範田邊志摩の供廻りを過つて破つた白石足立村の百姓四郎左衛門は無禮討になつた。時に享保二年（二三七七）の事である。四郎左衛門にはすみ（十一歳）たか（八歳）の二人の娘があつたが、これを無念に思ひ、陸奥守の剣道師範瀧本傳八郎の許に下女奉公をして六年間剣術を修業し、享保八年四月公儀の許を得て仙



吉原揚屋の段　切　豊竹古靱太夫　鶴澤清六

人形役割

傾城宮城野　吉田文五郎
女郎宮里　桐竹紋司
女郎柴　吉田文二郎
妹おのぶ　吉田文作
遣り手のお政　吉田多三郎
大黒屋宗六　吉田榮三
禿しげり　桐竹紋之助

臺、白鳥明神の境内で父の復讐を遂げたと云ふ物語である。

梗概

新吉原に今全盛の傾城宮城野の豪奢な部屋。女郎の宮里、宮柴二人が宮城野の許へ來て、昨日淺草から連れられて來たしのぶの噂。果ては宮城野の慰みにと嫌がるしのぶを無理無體に引立てゝ來たが、遣り手にたしなめられて座敷へ行く。

跡に宮城野、此田舍娘の故郷は奥州、姉が吉原で名高い女郎になつて居ると聞き、遙々尋ねて江戸へ出たと云ふのが氣に懸かり、奥州は何の邊かと聞けば、白石在の逆井村、父さんの名は與茂作と隱さず答えるものだから、驚く宮城野。

然う云ふ宮城野こそ、奥州白石在の百姓與茂作の姉娘で、父が年貢未進のため水牢へ入れられ様とした時、切迫詰つた難儀を救はうとて、憂川竹の流れへ沈めた身なのだから——。

が、妹のしのぶは姉さまなりや證據がある筈、と油斷せぬので、言はれて其れと氣付いた宮城野床に飾つた壺井の守を出して見せる。しのぶも首に掛けた守を見せ、始めて姉妹の名乘をした上、互の嬉しさ、懐しさ、抱き合つて咽び泣く。折しも來かゝつた亭主宗六は様子あり氣な部屋の體を見ると、密と隱れて次の間から窺ふ。

それとも知らぬ宮城野が、妹を引寄せて父母の安否を尋ねると、しのぶは思はず泣伏したが、また氣を勵まして父アは五月田植の時分、代官志賀臺七に討たれて非業の最後、母アは其悲しみが病の因で果敢なくなられたと語る。

宮城野は聞いて胸潰れ、癪をおこして苦んだが妹に介抱されて漸う氣付く。而して、そんな事とは露知らなかつた父母の最後を歎いたが、また屹と氣を取直すと、父はもと由緒正しい武士、浪人したれど其娘の宮城野、敵臺七の面差を妹に尋ね、江戸にあるてう許婚の夫を尋ねた上、親の敵を討

此処豊臣右大臣太夫相勤申候

たいで置かうかと、小褄からげて身拵え、奥の騒ぎに紛れて廓を逃出さうと妹を連れて立ちかゝると、宗六が現はれ、様子聞いたは表に出さず、意味あり氣に止めるので、さては始終を知られたかと悟る姉妹、懐剣抜いて斬りかゝるを、宗六は鏡臺の鏡を取つて受止め、假名本の曾我物語、恰度在合ふを譬えに引いて頼もしく語るので、宮城野しのぶも合點がゆき、身にも胸にも餘る有難さと掌を合はせる。

（床本）　吉原揚屋の段

入相の、鐘さへ早く暮れ果てゝ、廓の中は萬燈會、歌舞の菩薩の色揃へ。わけて全盛宮城野が、部屋は上品奥二階、箪笥長持鏡臺の埃取迄綾錦、袱紗なりけるありさまなり。此君の一字なり共次の間から、宮里宮柴打連て太夫様御機嫌はえ、ホンニさつきに貸本屋が參じて、先度の曾我物語の次じやといふて置いていんだぞへ。イヤ申し宮柴様、今日のお客は仲の町の蔦屋から、締からんだ二人一座、宮城野様はもとよりお前も早ふ身仕舞して

オ、せわしな、今身仕舞をするはいな、併し差合な顔はないかえ。イヽエどれも〳〵侍衆、一人のお方は器量よし、今一人は髯むつちや、目の大きい熊か人かといふ様な、どちらへ札が落ちうやら、いやな事ではないかいなと何處の浦も客嗜、そしるも廓のならはしかや。アヽコレ、そんな事いふて證手衆が叱ろぞえ。オヽ叱つたて、あたおかしい、イヤおかしい次手に、きのふ旦那様が、淺草で抱へて戻らしやんした奉公人、おかしい物言ひではないかいな。サイナア遠い國から姉を尋ねて上つたとの話、宮城野様の慰みに、連てきてお目にかけよ、お前もお出と連立つて行く後かげ見送りて、テモ扨も、わさ〳〵獨り物いふて、マア よい氣ではある程にの。コレ〳〵しげり、そなた其處らかたづけやと、いひ付る間もありやなし、新造二人が伴ひに、いやがる者をむり無體突出されたる田舎の娘、傍きよろきよろつひに見ぬ、錦の小より三づ蒲團、興さめ顔に。オヤ〳〵〳〵女郎さあ達、人が寢そべつて居る處を、用さア有る來とらへと、二階さあぶち上てこりやマア何たる所だ。どこもかも光り申して、お洒落の櫛さあ見る様に、塗こべえた箪笥さ

ア、其の上夜の物も金切れたもじやア、祇園も蘇枋染の色のよさ、われらアねまつたら、踵の皹さア引かゝつてうつ切べい、おやつかなたゑげ申す〳〵、と言ければ、打轉る程おかしさかくし。コレそこなお子、お前の故郷國所、爰へどうしてお出た譯、話して聞かさんしよば、お力ともならうにと、なぶると知らずしく〳〵泣。オヽやさしな詞おいやり申す、私ら國さア奥州、だゞアやがアまに様子有つて別れ申して、お江戸さあはあらく盛る處だアと聞き、其うへ姉さア此吉原の名高い女郎さアに成つて居さるとのはなし、女わらじの身として敵ない思ひをして、尋ねてくるも、海山物語りの有事、聞いて哀れを添てたべ。オヽモ何を言ふじやゝら、すつきりと譯が知れぬ、そして吉原で名高い女中を姉様とは、雲つかむやうな尋ね物。サアそれだから頼み申すは、昨日觀音さアで目眼のおつかない人が、連て行つて逢はしてやらうと、籠さアに乘せてくる所を、是の御亭の世話さアに成り申して夕から居申す、脚かけ申すも他生の緣、ほんで御座るわよ、赤はらはたれ申さぬぢや。アホヽヽ聞けばきくほどおかしい話、そして今の赤はらとは、あられもないと若い同士、糠もくづるゝ高笑ひ。知る人ぞしる宮城野が、押なだめて申しお二人、浪花の葦も伊勢の濱荻、所々でかはる物言ひ。其様に笑はぬ物、今あの子の言ふてじや有つただゞアやがアまといふはな、爰で言ふとゝ様かゝ様、又赤はらといふてじやは嘘はつかぬといふ事じやわいな。扨つても我折れよふ御存じ。オヽ知つたも無理か、愛臥は、夜毎日毎にかはる枕、心つくしの果は愚か、奥のとろくのお客にも、馴れ親しんだ身の一徳。オヽ其のお客で思ひ出した、奥のお客がやかましかろ、私も追付そこへ行く、先へお出てよい様に、コレ〳〵しげり仲の町の井筒屋へ行ての、昨日の返事聞いておじや、早う〳〵と云ふ下から、遣手の政が例のしやぎり。奥のお客のお待かね、何話して居さんすぞいのう。オヽせはしそんならわしらも奥へ行て、御客選らみの榮耀もいはず褒そべる處にア、何やら、オヽそれ赤はらたれて氣に入つて、日がら頼もと口々に、言ふて座敷へ行くふりを、見やる宮城野おのぶが傍。もしやそれぞと摺よつて、さつきにからの話しを聞けば、姉を尋ねる人さうな、奥州はどこらの生れ、何といふ所じやへ。アイ奥州は白坂

近在、逆井村といふ所。フン其逆井村といふ所に、與茂作といふお人が有らうがの。アイサ、其與茂作といふのはめらしがだゝ。ヤそんならわしが妹と、縋り寄るを突退けて、イヤ〳〵〳〵、がアまの常に云はしやるには、姉さアの方にもしるしが有る、それを證據に名乘合ひ、委細心底打明ろと、云めした、それが有るなら早うつん出し、見せてくんされ姉さアと、なつかしながら油斷なき。オヽ悧巧な人、疑やるも尤もと、立て簞笥の袋棚、襖開けばうや〳〵しく、淺草寺の觀世音、扉表具におしならべ、かざり置いたる筒守り、見るに妹も疾し遲し、首にかけまく壺井の守。コレ〳〵〳〵、此姉が國を出る時かゝ樣が大事にせいと下さんした此守。とゝ樣は、楠家の御浪人故、河内の國壺井八幡樣のお守、それを持つて居やるからは、妹じや〳〵、コレ〳〵、よう顏見せてたもいのう。オヽ姉さアでござるかいの、逢ひたかつたと諸共に、嬉しなつかし縋り寄り、外に詞も泣く計り。斯くぞといざや宮城野が、座敷へ出ぬをふしぎさに、來かゝる亭主宗六が、樣子有りげな部屋の體、忍んで事を立聞くとも知らず姉妹ひそ〳〵話。オヽ妹、よう尋ねて來てたもつた、年端も行かぬそなた、とゝ樣なり、かゝ樣なりと、いづれぞ付いてお出であらう、もし道中ではぐれてかと問はれてわつと聲を上げ。アヽコレ〳〵〳〵斯うめぐり逢ふからは、悲しい事も何にもない、泣いては濟まぬ、サアどうぞと、尋ぬる姉の心もそぞろ。エヽ遠國隔つた姉さア、それで何にも聞かないナ、だゝアは五月田植の時分、代官志賀嘉七といふ惡侍に、ヤアヤア〳〵と何といやる。打斬れてお死にやり申した。ヤアと恟り差込む癪。とつとモウ惡い時。そしてどうじや其跡は、サアおらだけもすんでの事殺さるゝ所、庄屋の伯父が駈つて來て、りきんでみても肝腎の、證據なければだゝアは犬死、雉子と鷹なりや敵討の勝負もならず、すごら〳〵。そんだの許嫁の御亭にも封面はしたれども、是も此江戸さあへ歸り申す、跡はおらだアけとがアまとばかり、賴りない身に下地の大病。ヤアお煩ひでもあつたかいの、シテ御本復なさつたか。イエ〳〵六月十六日に悲しや終にお死にやり申した。ヤア〳〵御養生も叶はなんだか。ハア、話しさあ聞いてさへ、そない歎かつしやる物、じぎに見とらへたおらだア心、エヽコレ、泣かつ

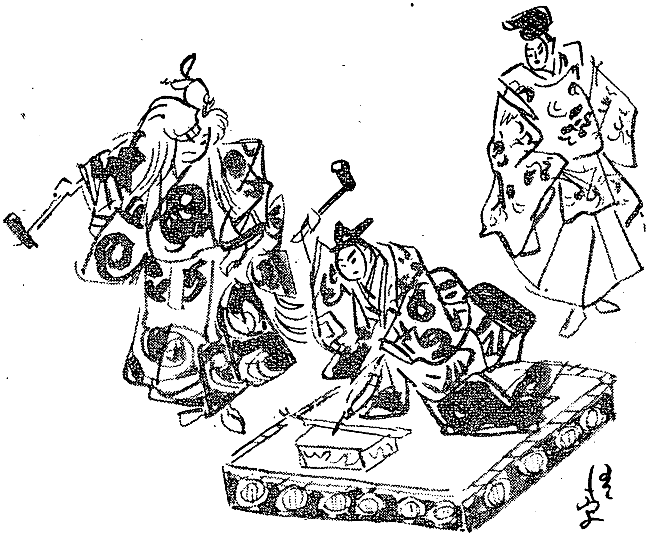
しやるは道理だけれど、頼りに思ふ姉さア又病氣おこしでは猶か濟ない。イヤ〳〵、イヤ〳〵、仲々煩ふ様な事じやない、そしてどうじや〳〵。サアなじよにもかじよにもおらだけ一人庄屋の伯父さまが引取つて、奉公しろと云ひすけど、何の奉公どころかい、口惜しいと悔しいで、跡先思はず檀那寺へかけこんで、坂東順禮するといふて、笈摺もらひ國元を、つゝ走つたもそなたに尋れ逢うたら、姉妹心一致に仕申して、だゝアの敵が討ちたいばかり、道中すがらの艱難も、そなたにあはふが樂しみに、がいに苦勞とは思はなんだ、併し逢ふたらかつばりと、しよつ骨が拔けた様な、コレそない歎かつしやる手間で妹はる〳〵尋ねて、よう來てくれためこがめらしといふてくんさい姉さアと、あやも泣き入る稚氣に、長の旅路の憂苦勞、思ひやるせも宮城野に、つゞくはすゑの松山を、袖に浪越す涙なり。歎きの中も姉は猶、妹が眷を撫おろし。オゝ其様に思やるも尤も、併しそなたは父母に、長う添やつた身の果報、此姉を見やいのう、年貢にせまつて、とゝ様は、水牢、其苦を助けうばつかりに、コレ此廓へ身を賣つたを、思ひ返せば十二年、そなたは五ツ子顏さへ見知らず、とゝ様の御最期や母様の死目にも逢はぬといふ悲しい不孝な、はかない事があらうかいの、斯うした事とは露しらず、此妹は健なか知らぬとゝ様かゝ様お煩ひでもあらうなら、よもや知らしてたもらふ物、便のないを杖柱、首尾よう年を勤めたら、國へ歸つてお二人に、樂させまして、どうしてと、色や浮氣を嗜んで、勤め大事と許嫁の、殿御の事も、そなたの事も、戀しなつかし思ふのを、たのしみ暮したかひもなう、名乘逢ふたは嬉しいが、悲しいはなし聞く姉が、心も推してたもいのと、手を取交はす姉妹が、涙々を立聞くも貰ひ泣して立わけの。暖簾もぬるゝばかりなり。つもる話は富士の山、かず〳〵多き涙の隙。こんな事聞かうはしか、借つて讀んだる曾我物語、兄弟の人々も、終には父御の敵討、コリヤ泣いてゐる所じやないわいの、アゝ是肝腎の事を忘れてゐた、此姉が許嫁の夫、此江戸にゐやしやんすとの話し、其お方の名所、定めて覺えてゐやらうのう、そりやせはしさに、何も聞かない。オゝモそれを知らぬといふ事があるものかいの、そふいふ事なら敵の顏も。それ知らないでよい物か。目眼のでつか

な鼻のひらたい男ぶり。モウよい〳〵壁に耳、御浪人こそなされたれ、由緒たゞしい武士の娘、オヽめらし姉妹じやてゝ、おのれやれ敵討たいで置かうか、オヽようやつた、出かしやつた、幸ひ奥の大騒ぎ、あれに紛れて此家を立退き、さうじや〳〵と妹が帶しめ直し我身も共に、小褄かいしよげ身ごしらへ、立退かんとする所を、唖簾引切りかけ出る亭主。コリヤどこへ。おゝ旦那様のいつの間に。おりや最前から、アいや、たつた今爰へ來た、が、わがみ達は敵、サアかたい約束の男が有る故、こゝをかけ落ち、コレわるいぞや〳〵、そしてマア其田舍娘を知つて居やるか、アイ、イヽエ。知るまいてい〳〵、昨日淺草でかゝへて戻つたわいなう。旦那様私らが今の話。サア聞いたでもなし、聞かぬでも。それ聞かれたら赦さぬと、突出す懐剣、さすがの姉妹、鏡臺の、鏡おつ取り丁々はつし。ヤ何と違うた物か、違はぬ物はそれ姉妹ナ、此鏡臺の鏡に移る二人の顔、似たりや似たり、花あやめ杜若、その五月雨のくらき夜に、敵を討つたる曾我兄弟、假名本の曾我物語、爰にあり合ふこそ幸ひ、おれが讀んで聞かそう、光陰おしむべき時、人を待たざることわり、隙行く駒つながぬ月日重なりて、一萬は十三歳になりにけり。ナ此道理、河津の三郎祐重といふ名有る勇者、大名の息子殿でさへ、五ツや六ツの頃よりも、思ひ立たれた親のかたき、なみ大抵の事でなければ討たれぬものじや、コレマ聞きや、大名の後室とも云はれる人が、曾我の太郎祐信殿へ、二度の嫁入せられたも謀、又息子の箱王丸を、いとしなげに坊主にせうと言はれたも、敵工藤祐經に油斷させう爲ばかり、其年月の憂き艱苦、無念口惜い事の有る條、是れ迄何ぼも芝居の狂言に取組んでして見せる繼父の祐信殿も大名、役に立たずの貧乏人と、後指をさゝれたも兄弟の子供衆に、實父の敵が討たせたい武士の意氣地、こりや是れ陰德と云ふ大義心、其上鬼王庄司左衛門といふて、伊東家の老臣が有つて、幼少な子供衆に、晝は終日劍術稽古、又夜もすがら机の上、忠孝の道を教へ、成人の後に及んで、兄貴を十郎祐成、弟御を五郎時致と名乘らしたも、北條殿といふ烏帽子親が有つたさかい、近いたとへは、おれが様な不粋むくつけな親方でも、親方じやと思ふてたもるし、こつちも又抱の奉公人じやと思へば、何事によらず引けを取らしとむない、アヽこんな事は言はいでも知れた事じやが、今の様な話しを聞けば、おりや見遁したい

〳〵、が、コレ爰をよう聞きや、首尾ようそなたが逃げ畢せてからが、悲しい事は遠國生れ、しつかりとした心當もなうて、江戸中をうろつきやるを、内人の者共が見付けて、何所そこにゐますといふ事を聞いて、アゝえいわい打捨て置けとは、親方の身でどうもいはれぬ、そりやモわがみ達計りでもない、此廓へくる奉公人に親孝行か、夫のためでない者は一人もない、あれも孝行じや、これも貞女じやと、それなりけりに仕舞ふては、こつちもおやま商賣取り置かねばならぬ、おれに成人の息子でもあつて、抱の新造呼出したり、色狂ひに身を打つと聞けば、獄道め、ぼいまくつてのける、勘當じや、と强意見する親の身が、人様の大事の息子殿が見えると、きやつえらい放銭じやわいの、コレ頼もしさうなお客じや程に、隨分大事にかけやと、智恵を付ける、マ此様な得手勝手な商賣はなけれど、こりや是浮世の身過ぎ世過ぎ、さういふ身分な此おれでも、慈悲と情といふ事は、不斷心に忘れはせぬ、マちよつといふて見ようなら、此宗六は最前いふた、鬼王庄司左衛門じやと思や。外に烏帽子親の北條殿といふ様な、後楯でも出來てから、ヤさつきの様に思ひ込んで、突かゝつた懐剣、おれにさへつい叩き落される様な事では、まさか敵に出逢ふた時、すつぱんの間にも合はぬほどに、おれがいふ詞に隨ひ、コレ〳〵此道をも稽古して、鍛練を熟した上では、ぐつと〳〵尻持つ合點。コレ駈落の尻もつて行かふとはいふまい、急ぐ所ではない程に、大事の勤め、駈落しようとは無分別お客大事に勤めてたも、合點がいたかと、つど〳〵に、曾我物語の引くゝり、讀切講釋一方を、頼もしげある亭主なり。二人は飛立つ忝け涙。身にも胸にもあり餘り、エゝありがたう御座んすと、姉が拜めば妹も、只伏拜む許りなり。オゝ嬉しいのは尤も、義を見てせざるは勇なし、わがみ達の様な奉公人見立てて召かゝへたといや、仰山なが、おれが目鏡もおよそ違はぬ、禮いふ事も何にも及ばぬ。ノ是れ、人の目鏡に悟られぬ様、隨分共けはひ化粧も美しうして奥の座敷へ、ソレ遣手の政はゐぬか湯をもつて來てやれいやい、しげりはゐぬかと呼出して言ひ付けるのも賣物に、花も實もある轡の宗六生粋の、淀まぬ座敷は大騒ぎ、率頭末社が彈く三味に、乘つて呑むやら唄ふやら、現たはひの喜見城、意見上手の親方がこもる情に宮城野が、妹を部屋に奥座引別れてぞ入りにける。

鶴澤道八作曲　山村若子振附

新曲　小鍛冶



老翁実ハ稲荷明神
小鍛冶宗近
勅使橘道成

[illegible]

人形

老翁実ハ稲荷明神
小鍛冶宗近
勅使橘道成

[illegible]

鶴澤道八作曲　山村若子振附

新曲　小鍛冶

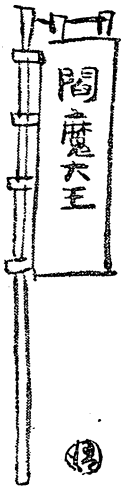
能にある「小鍛冶」をもとにしてなつたもので、鶴澤道八が作曲し、山村若子が振附に當つた新作淨瑠璃。刀鍛冶三條小鍛冶宗近が勅命で御劍を打つ事になつたが、勝れた相鎚が無い爲め氏神の稻荷明神に祈願をかけると氏神の稻荷明神の御神體が現はれて宗近を助け、相鎚に立つて小狐丸の名劍を鍛へ上げ、勅使橘道成に奉ると云ふ筋である。

（床本）　新曲　小鍛冶

これは三條の小鍛冶宗近にて候、さても此度大君より御劍を打ちて奉れと、かしこき宣旨を蒙りつゝ、かゝる大事をとらんには、我に劣らぬ相鎚の者ありてこそ御劍も成就なすべけれ。口惜しくもそれほどの者無しと答へまつらんには勅諚を背くのおそれ、いかにせむ、此の上はたゞ、神佛のおん功力、賴む心に相鎚を、求めんより他は無し。南無や氏神、稻荷明神わが身命に替ゆるとも、あはれ最勝の御劍を打出ださせて給れと仰ぐ御山の初紅葉、赤き心に吹き通ふ、下向の道の夕嵐。ゆくての方に老翁の、いとも氣高き姿にて、忽然として現はれ給ひ、なう〳〵あれなるは、三條の小鍛冶宗近にて御入り候か不思議やな、なべてならざる御事の、我が名を指して宣ふは、如何なる人にてましますぞと、雲の上より御劍を、打てとの仰せありしよなう、さればこそ、今うけたまはる勅命を早くもしろし召される事返す〳〵も不審なれ。おろかや宗近。げに我のみと知ることのいつしか他所にかくれなき、雲井に耀ふ御劍の、光はなどか暗からん。そも〳〵劍の始まりは、唐土にては于將莫耶、我朝にては十握の御劍の故事を、申すもかしこき尊には、東夷を討たせたまふとて、關の東にはるばると、御下向の道すがら、駿河の國の夷ども、御狩の御遊にことよせて限り知られぬ萱原へ尊を誘ひ申しける。紅葉に晩き神無月、千草百草冬枯れて、雪かとまがふ穗芒の、靡く風情を愛で給ふ。折から富士の山おろしに、つれて高鳴る攻鼓、あなやと見るまに四方より夷が放つ炎の勢ひ、尊をかこみて凄じく、いとも危き御有樣、其の時、尊は御劍を拔

き、直に火焔も立ち退けとあたりの草を薙ぎたまへば、劍の精霊嵐と成つて敵の方へと吹き返す、猛火は天地に滿ち〳〵て、さしも數萬の夷共、朝日に霜と消えてけり。かの草薙の御劍に、劣らぬばかり瑞相を、家に傳ふる宗近よ、とく〳〵歸りて壇を飾り、我を待ちなば其の時に、通力にて身を變じ、力を添へんと夕雲の、行方も知らず失せにけり。あら有難や尊やな、これぞひとへに氏神の擁護の功力と宗近が、心勇みて立ち歸る。

宗近裝束改めて、設けの壇に上りつゝ、幣帛を捧げ禮拜なし。今大君の御詔、御選みにあづかること、これ私の功名ならず、ひとへに氏神稻荷の神、擁護の德によつてなり、さあらば十方恒沙の諸佛神、骨髓の丹誠を納受あつて只今の宗近に力をあはせてたびたまへ、誦上再拜〳〵、一心不亂に祈願の折から、虛空はるかに聲あつていかに宗近御劍を、打つべき時は只今なるぞ。賴めや賴め唯賴めと、壇上に現はれ三拜の、膝を屈して直りける。秋ふけて夜寒の衣うつゝにも、露かしぐれかもみぢ葉の、とかるゝ色と我が心、打てや〳〵と鐵とりのべ、敎への鎚をはつたと打てば、ちやうと相鎚、ちやう〳〵〳〵、打ちかさねたる鎚の音は、天地に響きて夥し。陰陽和合たちどころに、打ち奉る御劍の、表には小鍛冶宗近、裏にはしろく小狐と打つも妙なる神寶。天の叢雲かゝるとも、むら〳〵雲のみだれ燒き、匂ふばかりの金色は、霜夜の月に照りそひて、いと潔く見えにける。勅命の御劍只今出來仕る。と恭しく捧ぐれば、道成欣然と領承あり。ほゝう、いしくも打ち奉つたるものよの、天下第一二つの銘。あら心地よや此の御劍、氏神明神になぞらへて、小狐丸と名づくべし。かゝるめでたき業物を、我が敷島の精神（こゝろ）となし、四海を治めたまはんには、高麗もろこしの民草も御稜威のもとにうち靡き、五穀成就や君萬歲と、傳ふる鍛冶の道ひらく。なほ行末を守るべし。これまでなりといひ捨てゝ、又むら雲にとびうつり、稻荷の峰にぞ歸りける。



攝州合邦辻

合邦住家の段

安永二年（二四三三）二月、大阪北堀江座初演。作者は菅專助、若竹笛躬の合作。全曲は上下二卷より成り、上の卷は發端があられの松原毒酒の場、中が高安館、切が綸旨取戻しの場、下の卷は口が天王寺西門の場、切がこの合邦住家の段に分れてゐる。

梗概

安井合邦の娘お辻は、氏なくして玉の輿、河内の國の領主高安左衛門の後妻玉手御前と云はれる身になつた。

所が如何なる天魔が魅入つたのか、義理ある先妻腹の子俊德丸に想ひを寄せ、何かと云ひ寄るので俊德丸は道ならぬ戀に堪えかねて、許婚の淺香姫と手をたづさへ玉手の親の合邦の庵室へと身をさけたのであつた。この事を知つた玉手は、尙も

合邦住家の段

切
竹本叶太夫
鶴澤寛治郎
竹本角太夫
豐澤廣助

後
陸路太夫改メ
竹本七五三太夫
鶴澤綱造

人形役割

玉手御前　吉田文五郎
親合邦　吉田玉藏
合邦女房　桐竹紋太郎
奴入平　吉田玉幸
俊德丸　吉田文作
淺香姫　吉田光之助

俊徳丸の後を慕つて合邦の庵室まで追つて來たけれど、合邦は俊徳丸から娘玉手の邪戀を聞かされて居るので、高安殿への義理を思ひ、どうしても門側も踏せぬと、内へ入れやうともしなかつた。然し遖に母は女の身の心弱さから、玉手を幽靈と云ふ事にして、幽靈ならば入れても仔細はありますまいと合邦を説き伏せ、漸く内へ入れて不義の云ひ譯けを聞かうとした。と玉手は云ひ譯けどころか「思ひ切られぬ戀の道、俊徳様の御行方尋ね女夫にして下され」とかき口説くあり様なので、合邦は今更の様に呆れ果て、俺も以前は青砥某と云ふ歷とした武士、浪人しての捨坊主ながら、誠の道を通して來たに、と怒り立ち、唯一刀に斬つて捨てんとした。

母親は、これをなだめ、必ず娘に思ひ切らせて見せますと、玉手を無理に奥の一ト間へ連れて行つた。

折柄奴入平は俊徳丸の後を尋ねて來たのだつた

が、フト玉手の姿を見付けて、様子をうかゞはんと傍に身を忍ばせて居たが、一ト間から兩眼盲た俊徳丸が、淺香姫に手を取られて、なよなよと現れるので、入平は、斯くまで玉手御前が執念くつきまとふ上は、一刻も早く此の家をお立ち退きあれかしと、既に伴ひ出やうとした。

その時玉手は奥から走り出で、俊徳丸に取り縋り、入平の意見の言葉も耳に入れず、又しても切ない戀をうつたへるのだつた。

これを耳にした合邦はたまりかね、一刀脇腹深く刺し通し、その息の根を止めやうとするので、玉手は是を、しばしと止め、痛手に悩みながらも「是には深い様子のあること」と自分の苦衷を物語つた。

それは、高安の妾腹次郎丸が奸臣坪井平馬と心を合せ、己が家督が繼がんものと、その爲に俊徳丸の一命を奪はんとしてゐる事を知つたので、心にもない戀をしかけ、毒酒に形相を變へさせたのも、御家督さへお繼ぎなくばお命に別状なからうと、思ひ餘つての思案だと云ふのである。そして又、かうしてお後を慕ひ參つたのは、此の病を本腹させるため、と云ひつゝ手にする鮑貝を出して寅の年月揃つた我が血汐を盛つて、俊徳丸に飲ませると、不思議や人相はもとの通りになるので、一同は初めて玉手の苦計を知つて今更涙にくれるのだつた。その時にはもう玉手の最期は近づいて居た。合邦が取り出す百萬遍の珠數の輪の中で、玉手御前は一同に見守られつゝ大往生を遂げたのであつた。

（佐和利）　**合邦住家の段**

オ、嘘か〳〵と箸持つて、くくめる様な母の慈悲、面はゆげなる玉手御前、母様のお詞なれど、いかなる過去の因緣やら、俊徳様の御事は、寢た間も忘れず戀こがれ思ひ餘つて打付けに、云ふても親子の道を立て、つれない返事かたいほど、猶いやまさる戀の淵、いつそ沈まばどこ迄もと、跡をしたうてかちはだし、あしのうらうら

難波がた、身をつくしたる心根を、不便と思うてとも〳〵に、俊德様の行衛を尋ね、女夫にして下さんすが、親のお慈悲と手を合はせ、拜み廻れば、母親も、今更あきれ我子の顏、只打守る許りなり。

マアマア待てくれ〳〵娘、とても生きぬそちが命、臨終正念未來成佛力賴む百萬遍、此人數でくる珠數の輪の中で往生せいと、取々廣げる珠數の輪の、中に玉手は氣丈の身構へ、俊德丸を膝元へ、右に懷劍左に盃、外には父の親粒が、導師の役と鉦撞木、母は涙の目を明かず、宵は死んだと思ひ子が、回向の爲の百萬遍、今又無事なと悅んだも、露と消え行くすゝめの念佛、南無阿彌陀佛々々々々、內にはなんなく切さく鳩尾、自身に血汐受けたる盃、さしつくる手もわな〳〵わな、俊德丸は押戴き母の賜、天地にも餘るばかりの御芳志と、只一ト口に呑干し給へば、不思議や忽ち兩眼ひらけ、面色手足もまたゝく中、昔の姿に迎り咲き、花の顏見る手負ひ、苦しき片頰に笑ひ顏、ヤア御本服かと一座の悅び、早や斷末魔の四苦八苦、鉦を早めて責念佛、なまいだ〳〵なまいだ願以此功德平等に、死骸に取付き縋りつき、悲しき涙、忝け涙庭に波打つ許りなり。

文樂座小史（昭和十六年調査）

○竹本座創立（現今ヨリ二百五十七年以前）
貞享元年二月（道頓堀西ノ芝居）

○文樂座發祥（現今ヨリ約百五十年以前）
天明年間淡路ヨリ植村文樂軒大阪ヘ來ル

○第一次稻荷社內時代
文化八年ヨリ天保十三年ニ至ル

○西橫堀新築地濱時代
天保十四年ヨリ安政三年ニ至ル

○第二次稻荷社內時代
安政三年ヨリ明治四年ニ至ル

○松島千代崎橋時代
明治五年ヨリ明治十七年ニ至ル

○御靈神社內時代
明治十七年ヨリ明治四十二年ニ至ル

○松竹合名社繼承
明治四十二年三月植村家ヨリ繼承

○御靈文樂座燒失
大正十五年十一月二十九日

○隨時興行時代
昭和元年ヨリ昭和四年マデ道頓堀辨天座ヲ始メ其他隨時興行

○四ツ橋文樂座創立
昭和四年十二月以來現在ニ至ル

觀賞おぼえ

昭和十六年六月　日

忠臣藏

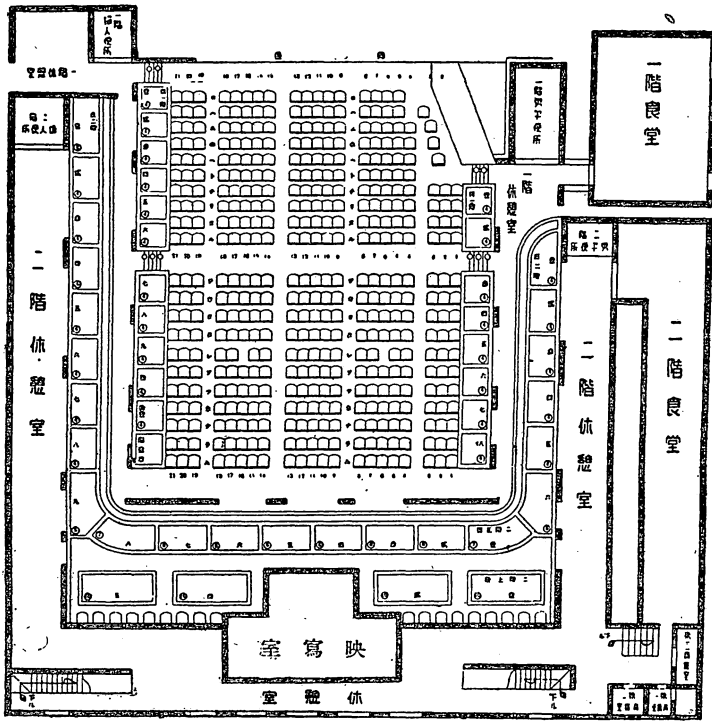
一谷嫩軍記

碁太平記白石噺

攝州合邦辻

新曲小鍛冶

文樂座御席場御案内



御觀覽席は大部分椅子席になつて居りますからお一人でも御愉快に洋服でもお樂に御見物が出來、またお出入が御自由です。

前賣切符・壹等席のお切符は五日前から發賣致します、また五日以後のお切符も壹等席に限り御豫約申し上げますから上圖の座席表に依つてお早く御望みの御場席をお申し込みになればお心のまゝにお好きな處が御自由にとれます御用命のお節お呼出しの電話は

南四七壹壹番で御座ゐます

切符賣場右指定席切符は當日前賣とも正面西側本家入口にて發賣して居ります

二等席・三等席切符は當日正面入口にて發賣致します

六月の芝居御案内

大阪	道頓堀	道頓堀	京都四條	神戸湊川
歌舞伎座	**中座**	**角座**	**南座**	**松竹劇場**
電話戎二八二六	電話南一二七九	電話南二二一二	電話祇園一一五五	電話湊川四四〇四
一日初日	一日初日	一日初日	卅一日初日	一日初日
毎夕四時開演	晝正午 夜五時 二部開演	晝正午 夜五時 二回開演	晝正午 夜五時 二回開演	晝正午 夜五時 二部開演
井上正夫・水谷八重子・演劇道場・藝術座 **合同劇** 日曜マチネー（十一時より開催）	巨頭精鋭顔揃ひ **六月大歌舞伎**	**新舊合同劇**	**松竹家庭劇** お目見得陣	名作ぞろひの **大歌舞伎**
第一 兄いもうと 第二 天高き日 第三 歌女おぼえ書	（晝の部） 曾我物がたり 佐々木高綱 志渡寺 （夜の部） 貝殻島にて 南部坂 船場の夢 浮世繪 鳥羽繪	第一 動八魚屋と畫家 第二 江戸風俗 初すがた 第三 和解 第四 平次の女難	第一 耳の戀 第二 老水兵 第三 ある日の隣組 第四 尊き働き 第五 日蔭の花	（晝の部） シャムロ船 伊賀越道中双六 双面水照月 （夜の部） 鶊山姫捨松 いろは文庫 薩摩訛情諷 女戻駕
觀覽料 櫻席 六十錢 菊席 八十錢 三等席 一圓三十錢 二等席 一圓八十錢 一等席 四圓 （税別）	觀覽料 五等席 五十錢 四等席 八十錢 三等席 一圓十錢 二等席 一圓五十錢 一等席 二圓五十錢 特等席 二圓九十二錢 （税別）	觀覽料 四等席 五十錢 三等席 七十錢 二等席 一圓 一等席 一圓五十錢 特等席 二圓〇九錢 （税別）	觀覽料 四等席 五十錢 三等席 七十錢 二等席 一圓 一等席 二圓 （税別）	觀覽料 五等席 五十錢 四等席 八十錢 三等席 一圓二十錢 二等席 一圓六十錢 一等席 二圓九十二錢 （税別）

開演毎に一方ならぬ御後援御來觀を賜り厚く御禮申上ます

當文樂座は 既に皆樣御承知の通り我大阪に於ける鄕土藝術、三位一體の人形淨瑠璃の日本唯一の公演場でムゐます。

文樂座人形淨瑠璃は 啻に大阪の誇りとする鉢臺藝術のみならず我日本に於ける古典鉢臺藝術の至寶として世界に誇るべきものであります。從つて開場毎にこの大使命が全う出來ますやう、皆樣の御期待に背かぬ樣、皆樣に御滿足して頂けるやうと一同不斷の努力を致して居りますが尙御氣付きの點は御客樣の御聲として承りたく存じます。

御携帶品は 正面一階に御預り所が御座ゐます。お帽子は椅子の下に設備がありますからそれへお願ひ致します。お歸りは混雜致しますからお履物は成べく終演一幕前に御受取願ひます。

貴重品は 各自にお持ち下さい。お場席お立ちのときは御携帶願ひます

お煙草は 一階二階廊下に喫煙台を備へてありますからお煙草はぜひ此處でお願ひ致します。お席では御遠慮下さい。

お食事は 西側別館の階上、階下に大食堂と喫茶室が御座居ます。

賣店は 二階東側と一階西側休憩所に御座ゐます。

お化粧とお手洗 殿方は西側の一階と二階に、御婦人は東側の一階と二階に御座ゐます。

場内にて 寫眞撮影は絶對にお斷り致します。

御休憩の間は 一階西側に給茶處と大休憩所の設備が御座ゐます。

お出口は 下足札赤札は正面西本家入口でお渡し致します。黑札は正面入口東側でお渡し致します。

案内人は 胸に番號入マークを附けて居りますから御用の節は御申附け下さい、其他一般從業員に不行屆の點は御遠慮なく御注意の程お願ひいたします。

出演者 病氣其他の事故にて出場不可能の場合は乍勝手代役にて相勤めますから豫め御諒承願ひます。

◇皆樣へ御案内◇

當座は此度皆樣へのあらゆるサービス機關として案内部を特設いたしました。

人形淨瑠璃についての御質問・各種團體御觀賞會・又は諸種の御會合席上へ出張公演等御相談に應じ、よろづ御案内申上げる事に致しました。御一報次第參上、どうぞ御利用下さいませ。

專用電話南(75)三七八八番

松竹株式會社

文樂座

支配人 下村清次郎

昭和十六年五月卅一日印刷
昭和十六年六月一日發行
大阪市南區久左衛門町八番地
發行所 松竹株式會社大阪支店
大阪市南區久左衛門町八
松竹株式會社大阪支店内
編輯兼發行人 鳥江銕也
大阪市西區土佐堀通一丁目十二
印刷所 永井日英堂印刷所
一部 (停)金二十錢

文樂座南一食堂

御食事の御用は一幕前に御下命賜
はれば至極御便利で御座います

御食事時間（五時から八時まで）

御宴會にも
御家族連にも

大阪四ツ橋

南一温泉料理

電話南⑮
七〇一一番
一三三一番
一三三二番
一三三三番
一三三四番